第３９号　2011.9　発行（年３回 1月・4月・9月発行）

心の季刊誌

もくれん

自分さがしの旅（その38）

高照寺住職　密祐快

トトニカパンという名の村に住居を決めたのは標高が二千八百メートルという高地であること。たしかに昼夜の温度差には驚いたが、山中にひっそりと暮らす人々の柔らかな人情に魅了されたからだと思う。この村は観光的なものが無い村であったことが素朴さを維持してきた理由だろう。村の中心地を歩くとアジア人の旅行者が珍しかったのだろう。子供たちがついてくる。口々に「チーノ（中国人）」と言う。我々がその昔ヨーロッパ人を見ても「アメリカ人」と呼んだのに似ている。間違った国名で呼ばれるのは良い気はしないが、アジア人の総称が「中国人」なのだ。「ソイハポネス（私は日本人だ）」と言ったところで空しさが残る。だって日本なんて誰も知らないから。

そんな村に住みつくことになった。これは記憶がハッキリしないがマリッツァという少女と弟のレンソに初めて出会ったのは村の小さな食堂だったように思う。この二人の姉弟に「この辺に借家が無いかなぁ。」と期待しないまま尋ねると、家に連れて行き、この子供達の父親に出会うことになった。そこで小高い山の中腹に空き家を持つ大家さんを紹介してもらった。土塀で囲まれた庭付きの一軒家。それも敷地内に建物は三軒あり、そのひとつが台所小屋だった。一番大きな建物は二十畳はあり、土間であったが電気は裸電球が一灯ついていた。入り口の簡単な門の横に倒れそうなトイレ小屋がある。かつて大家さんが住んでいた家に違いない。日干しレンガを積み上げた家だが石灰で白く上塗りしてあった。一ヶ月の家賃は五ケッツァルなので一ケッツァルは当時三百六十円だったから日本円で千八百円。日本語の補習学校の月給が百ケッツァル。「なんとかなるやろ。」新しい生活がこの家で始まった。

トトニカパンという町はすり鉢状になっていて町の中心はすり鉢の底にあたる。町の中心には立派な教会が聳え立つ。信仰深いインディオ達は教会に良くお参りをする。山奥に暮らす人達は日曜日の市が立つときにお参りをした。商売は町の中心地に住んでいるインデォたちがやっている。小さなホテルもあり、食堂もあり、酒場もある。グアテマラ市から遠く離れたここではスペイン人とインディオとの混血は少なくて、かなり純粋な状態だ。

さて、私の新住居の位置は町の北山の斜面にあたる。南向けの家だ。日当たりは良い。もともとこの国の人達の住居内部は台所にあたる建物と寝室になる建物があり、寝室はベットが普通。床は無く土間のまま。そこにベッドがおかれ、その近くに衣料を収納するタンスが配置されている。壁にはキリストが貼りつけにされている絵か聖母マリアが幼児のキリストを抱いた絵が飾ってある。

実はインディオには元々の宗教があった。後日知ることになるがマヤ族の神々の中には人身御供を望む神があり、昔は実際に娘をいけにえにしたと伝えられている。私が住んでいた三十数年前には、南側の山にその神が祭ってあり、インディオはその当時も彼らの聖地にお参りしていた。ご神体は一抱えほどの普通の丸みを帯びた山の石であったが、周りには花と食物が供えられ年に一度鶏の生血をその石に塗るのだと聞いた。しかしインディオの友人によればその信仰はキリスト教からは邪教とされ、信仰することを禁じられているからここは秘密だよと言った。実は彼らが真に信仰していたのは彼らマヤ族の神々であり、家の内部に貼り付けてあったキリスト教の絵は、さも敬虔なキリスト教信者であると装うものであったに違いない。警察や軍隊が取り調べにくることがあるのだろう。政府はゲリラを恐れ、クーデターの要因になるものは全て排除した。宗教もまた根深く心に宿すものであれば神経を尖らせていたのだろう。

貧しい国々を歩いてきた私は、キリスト教以外は全て邪教と呼んで弾圧するカトリックの押し付けがましい高圧的な体質にへきへきする感情をもっていた。

筆者が昭和48年から３年間、世界各地を放浪した時の話である

もくれん誌のバックナンバーはホームページ上にあります。http://hana5.web.infoseek.co.jp/

昨今の葬儀について思う（前編）

高照寺住職　密　　祐　快

先月思わぬ訃報が飛び込み、一週間前にお寺参りと墓参りに帰郷され元気にしておられた老女が急死されたとご遺族からの知らせ。詳しい日程はこれからだが故人が生前に強く希望していたので是非とも葬儀の導師をお願いしたいとのこと。遠く神奈川県川崎市からの電話だった。

亡くなった本人は八鹿在住だった人。まさかと言う驚きではあったがご依頼を承諾し、その後の日程などの連絡をとりあい、通夜当日午前十時前に副住を伴って電車で出かけた。新横浜駅に着いたのは午後三時過ぎ。迎えの車に乗って三十分後に葬儀会館に着いた。

三階が通夜と葬儀会場との事。寺院控え部屋に法衣が入った荷物を置き、遺族の挨拶を受けた。道中の労をねぎらっていただいたが、考えてみれば昔の時代とは違って八鹿を朝十時に出発しても午後三時には到着するのだから決して遠くはない。

早速会館の職員にお願いして墨と小筆を用意していただき、部屋に用意してあった白木の位牌に考えていたお戒名をしたためる。通常都会の僧侶が葬儀に際して筆を使い準備するのはこれだけだ。宝冠も卒塔婆も四本幡も天蓋も六道も無い。聞くところによると筆を使わない僧侶は白木の位牌に直接書かず、パソコンを使って戒名を印刷したシールを貼り付けるか紙位牌を貼り付ける人もいるそうだ。筆字が上手か下手かは別として、導師を務める僧侶が心を込めて墨と筆で書きしたためるものではないかと私は思うが、ドライな都会の僧侶にはどうでも良いことなのかもしれない。古式にのっとった正式な葬儀をしようとしても白木の位牌以外の書き物は書いたことがないから書けないのが都会の僧侶。情けないとしか言いようが無い。

とは言うものの高照寺がある養父市八鹿町においても近年随分葬儀の形態が変わってきた。

自宅葬が当たり前だった数年前から葬儀会館を利用しての葬儀の日常化である。もともと都会派の葬儀の形がとうとう田舎にもやってきてすさまじい勢いできっちり定着してしまった事に今更ながら驚いてしまう。何故都会では会館葬が必要なのかには理由がある。

その理由のひとつが乱立する高層マンションでの生活形態。これは生きている人には便利かも知れないが葬儀には向かない。度々報道されるマンションでの孤独死に象徴されるように他人を自宅に入れることを極端に嫌うのが都会派。ならば自宅葬などありえない。

かつて東京の下町上野界隈では町屋は長屋であったから自宅で葬儀をしたと言う。それが出来なければお寺の本堂を借りて葬儀をした。バブル経済の時代に相続税が払えず長屋を手放すとその度に細長いペンシルビルが建ったと不忍池の近くで住職をする友人が言った。有名な上野の寛永寺でも葬儀のためにお寺の本堂を貸す。港区高輪の高野山東京別院も葬儀の会場を貸している。上野の友人のところでも本堂を貸している。

ある日、私がそのお寺を訪ねたとき他宗の坊さんが導師を勤めて通夜と葬儀を行っていた。友人住職は一切干渉しない。そのすべてを葬儀屋が仕切っていた。家では葬式をしない習慣が定着している都会では、死者が出るとまず葬儀会館を予約するところから始まる。二～三日待って通夜ができれば早い方だ。市営の会館は使用料が安い為か最低一週間は待たねばならない。そう遠ご遺体は住んでいた家には帰らず葬儀屋の冷蔵庫に保管される。その間遺族は亡くなった肉親と逢うことは無い。私からみれば理解できない時間だがそれが都会派。近年「直葬」と言うものが流行っている。都会での現象。つまり病院で亡くなったら葬儀をしないで火葬場に直行して火葬すること。宗教無しの葬儀。葬儀とは言えないから死体処理と言うべきだ。

東京都では四割以上の人が直葬をしていると葬儀社の社長は言う。何故だろう。理由はもちろんある。まず葬儀に関わる経費が異常に高額であることが原因。山手線の内側や横浜市内では僧侶への礼金が平均数百万円だと受け取る側の上野の友人僧侶が言う。その上会館の使用料、病院から会館までの遺体の搬送費、霊柩車の使用料、これらは全部別会社で、支払いもそれぞれ。全部合せると五百万円は軽く超えると聞いた。

東京に住むすべての人が、この高額な葬儀が出来るかと言えばそうとは思えない。年収二百万円以内で生活する人も多いと聞く。そうなれば死んでも葬儀は出せない。葬儀は高額所得者だけの特権となっている向きがある。だから

多くの人は直葬を選ばざるを得ないのが現実。なんとも言いようの無い空しさを覚える。当地方での葬儀にかかる費用は平均百数十万円位だと葬儀社の社長は言う。高いか安いかは読者の感じ方によるだろう。

ともかく会館葬が定着した昨今、亡くなった人の霊魂が満足して黄泉の国に旅立つことができるように。そして遺族が肉親との別れを十分できるように配慮した葬儀をしていかねばならない。

数年前までの自宅での葬儀が伝説になるのも間近かだろう。私がまだ小学生だった頃に途絶えた土葬のように、葬列を組んで送る風景も今は見ることが無い。葬儀会館に行けばお金さえ払えば簡単になんでも揃うという、まるでスーパーマーケットやコンビニに買い物に行くようになっている現実に不快を感じるのは私だけだろうか。

かつてコンビニが但馬に無かった頃、都会に乱立するコンビニやスーパーマーケットが一軒でも但馬に来てほしいと思った矢先、二～三年で高照寺から車で約七分の距離内にコンビニが六軒出来た。スーパーマーケットも五軒もある。便利と言う名の経済の都市化である。コンビニと違って切望したわけではないが葬儀会館が各市に出来はじめたのが四～五年前だったろうか。豊岡市に大手チェーンの会館が建ち、それに危機感を持った各市の葬儀業者が競って会館を建てた。現在葬儀会館は但馬に十八軒あり、現在一軒が建築中だと言うから驚いてしまう。それだけではない。先ほどの葬儀社に尋ねると、取り扱う葬儀の九十五㌫が今日では会館で執り行われると言う。また養父市内の遺族の八十㌫が会館葬を希望するとも言う。この葬儀の大変化の行き着くところは一体何だろうか。

『弔う』ことの軽視、形骸化なのかと思っていた矢先に今年三月、東北大地震が起きて日本人の生死観が問われ、生死をも含む大自然との関わりを問い直すことになった。大自然の恐ろしい脅威的な力を見せ付けられたからだ。今も何千人にも及ぶ震災犠牲者が未発見のままであり、多くの寺院も津波に飲み込まれて破壊され、もちろん民家も葬儀会館も無く、しばらくして津波の被害を免れた寺や公民館において犠牲者の葬儀が行われたが、僧侶も葬儀業者もビジネスではなく、葬儀一条の死者を送る追悼と慈悲の心がそこに見えた。

黙祷という形にして今も続いている追善供養もまたそうだ。慈悲の悲は心を同期することだ。悲しむ遺族とともに黙ったまま涙を流しあうことを言う。悲しみの共有である。私たちは普段の葬儀の中で果たしてどれほどの悲の同期をしているだろうか。単に黒い礼服をまとっているだけではないのか。かつて土葬していた時代、葬儀後、死者を納めた棺と共に長い葬列を組んで墓地向かっていく。死者にとっては最期のゆったりとした時間の流れがあり、参列者は道端で手を合わせ、元気だった頃の故人を思い涙して葬列を見送った。葬列には視覚的にも悲の同期を誘われる情景があった。しかし葬儀会館の出棺にはその情景は無い。

これからの時代、遺族以外の参列者はどのような心で葬儀に臨めばよいのだろうか。僧侶の私にもまだお伝えできる答えが見つからない。

さて、川崎市での通夜も翌日の葬儀も多くの親族や会葬者と共に粛々と営まれ、老女の棺は花で埋めつくされて荼毘に付された。そして四十九日間の忌中が過ぎ、遺骨は但馬に戻り、忌明け法事の際に納骨し、今は高照寺の東霊園の墓地に父母の遺骨と共に永久の眠りにつかれた。八十数年もの間、頑張って一生を過ごした女性の最期のお顔は穏やかで微笑んでいるようだった。

（右写真）よく見られた但馬の葬列
写真は西村葬儀社様より拝借。感謝

第16回 白萩祭のご案内

今年で16回目となる白萩祭が9月25日㈰に開催されますので是非お越しください。

毎年恒例のジャズコンサートと陶芸家の陶器市は今回をもって最終となります。

次回からの白萩祭はリニューアルされた新企画で皆様をお迎えいたします。ジャズコンサートについては有料席です。ご予約は9月1日より受付開始。

■ジャズコンサート日時（3回ステージがあります）
●9月24日㈯　夜7時開演
25日㈰　午後1時30分開演
25日㈰　午後6時30分開演
●コンサートチケットは前売り大人各2,300円
●申込み先　高照寺電話　079(662)2865
ピアノサロンチャイム
079(662)3703

高野山修行参りのご案内

毎年秋に高野山修行参りを実施しています。どなたでも参加できます。但馬周辺にお暮らしの方は高照寺駐車場から中型バスを出しますのでご利用ください。姫路駅経由高野山に向かいます。遠方からご参加の方は直接高野山に向かっていただき、現地で合流します。一年に一度心も身体もスッキリさせたい方はどうぞ。

■実施日　平成23年10月29日㈯～30日㈰
■修行内容　本山布教拝聴　奥の院参拝　お百度参り　写経or瞑想法　授戒　清掃作業
■費用　実費　宿坊の宿泊代10,000万円
■参加資格　どなたでも
■申し込み方法　参加されます方の氏名と住所、年齢を列記しFAX、郵便で高照寺までお申込み下さい。
高照寺FAX　079（662）3130
■締切日　10月20日

☆展覧会のご案内☆

第9回『現代作家展』
会期　平成23年10月8日～23日
会場　ルネッサンススクエア
姫路市三左衛門堀西の町205-2
079（224）8772
AM10時～PM6時　水曜日休館
私の新作も展示します。ご覧下さい。

現在制作中、暑い中工房で頑張っていますよ！ふぅ

お便りコーナー

○読者からの便り

ごぶさた致しております。今年は鳴門も三十六度の猛暑です。今年は又いつになく暑く感じます。いつも花のたよりありがとうございます。たのしく拝見させていただいております。……中略……これからもたのしみにいたしております。特に外国での旅、うらやましくもあり、自分は無理と思いながら読ませていただいています。

（徳島県鳴門市）吉本　さん

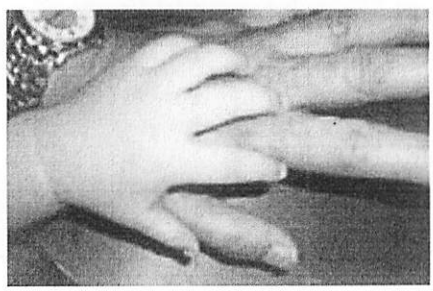
ご寄付をいただいた皆さんへ

ありがたいことに『もくれん誌』第三十九号を発行する事ができました。季刊誌発行にご協力いただく方があったればこそ続けることが出来ます。有難うございます。この紙面にお名前を掲載して御礼に代えさせていただきます。今後もお力添えをお願いいたします。合掌。

吉本三郎（鳴門市）　川口マス子（大阪市）　中尾啓子（大阪市）　藤原啓五（西宮市）　西井利治（京丹後市）
上川秀清・セツエ（福知山市）　西村龍雄・玲子（京都市）
馬場崎美恵子（養父市）　岡村　晃和美（三木市）
前田正義（池田市）　松島照義（門真市）　高見常子（加西市）　池田友恵（和歌山市）　静　孝（神戸市）　高橋智恵子（舞鶴市）若狭栄子（舞鶴市）　（順不同・敬称略）

編集後記

孫は面白い。内外一人ずついる孫は赤ん坊から今日までわずかな時間の中で驚くほど成長が早い。名古屋に住する方は四歳。高照寺で私と一緒に暮らしている方は一歳半。ともに男の子。可愛いものだ。今朝思いついて手を重ねて写真を撮った。この小さな手は今だけ。すぐに立派な手になって私の手を越していくに違いない。顔の無い記念写真。だし雑魚ほどのか弱い指も最近は力強く軽妙に動く。手を繋いで散歩すれば私の指二本を握り締める。本堂に行けば仏様に手を合わせてお辞儀する。言葉はまだだが不思議な指が言葉の代わりを勤めているようだ。（祐快　記）



●もくれん誌　購読の申込み

会費・購読料の徴収はいたしません。読んでいただいて少しでも心が癒されてくだされば嬉しく思います。もし、心に余裕ができて、少しでも援助してやろうと思われましたら無理の無い善意の浄財をお送りいただければ有難く思います。

購読のお申込みは①お名前②ご住所③年齢④電話番号を葉書に書いてお申込み下さい。メールでも構いません。次の発行時にお送りいたします。

もくれん誌友の会
667-0043
兵庫県養父市八鹿町高柳一一五六　高照寺内
FAX〇七九一六六二一三一三〇
振替　〇一一五〇一八一七八九七五
加入者名　高照寺